

特別許可を待つ兄弟

父の死に立ち会えず

父は声を上げて泣いていた。息子は「僕たちが帰るまで元気で待っていて」と励ますことしかできなかった。「死期が近く、もう僕らに会えないと分かっていたのでしょ。ファン・パン・ハウさん(43)＝仮名＝は、父が亡くなる一週間前の電話をよく思い出す。

ハウさんと兄のレイさん(46)＝同＝はタイ北東部でベトナム難民の父とラオス出身の母の間に生まれた。運送業などを営み、11人の子供を養った父は口数の少ない人だった。ただ子供たちに「まじめに働け」とよく言った。89年、苦しい家計を助けるため日本への出稼ぎを決意した2人を、父は「こう言って許した。3年間頑張ってください」。当時のタイでは難民とその子供は無国籍とされ、出国は認められなかった。2人は同年、プロカーから1人約60万円で購入したタイ国籍の偽造パスポートで来日した。

国と国の

ちがいを

⊕

在留資格なき無国籍者

「タイに一度帰りたい」

はやる心を抑え、レイさんは在日タイ大使館へ赴いた。だが、タイにいた当時の身分証を見た職員は「ベトナム難民はタイには入れない」と乗っか。境遇を懸命に説明しても、職員は無関心だった。ベトナム大使館にも出向いて身分証を示したが「ベトナム国籍の証にはならない」と言われた。自分たちが飯に強制退去になっても受け入れる国がない存在だと初めて知った。「僕らはどこの国の人間なのか。絶望感に襲われた。『我慢しろ』と2人を病床から励ましたのは父だった。『いつかは制度が変わるから』。だが98年5月、その父は73歳で逝った。せめて父の墓参りがしたい」。人道上の特別な事情などを認めた不法滞在者に与えられる在留特別許可(在特)を得れば出国に道が開けることを知り、入管管理局への出頭も考えたが、収容の恐怖が二の足を踏ませた。だがその後、母の体調も悪化したという知らせが届く。「母には会わねば」



在特を求めて名古屋入管に出頭する2人。許可はいづつ得られるのか—名古屋市中区で、大竹誠之撮影

国内で理不尽な制約のある生活を強いられる「在留資格のない無国籍者」。国と国のはさまに落ち、社会から目を向けられることもなく苦しむ彼らの姿を追う。

【山口知】

長兄(56)も今月、肺がんで死んだ。76歳の母は糖尿病や高血圧で体調が悪いました。2人は一度タイに帰る日が来ることを、ただ、祈っている。「僕らに国籍はないが、家族がいる。家族が大事なのは他の人と一緒なんです」

*

2人は今、静岡県内の工場でアルバイトをしながら在特の審査を受けている。2カ月に1回、入管に出頭して仮放免許可書に押印をもらう。いつ在特を得られるかの見通しは全く立っていない。入管は「東京(法務省)から連絡が全く分らない。いちいち聞かない」と繰り返し、何を審査しているのかさえ教えてくれない。

*